

## ザンビア通信 vol.6

青年海外協力隊 平成 22 年度 3 次隊

ザンビア 理数科教師 金田直己

ザンビア人教師の指導力の向上の為ザンビア理数科教師隊員は不定期に現地教員を対象とした授業研究を行っています。多くのザンビア人教員は「板書と話のみ」の授業を行っており、ただ生徒は座って教師の話の聞くだけになってしまっています。これでは生徒の理解へなかなかつながりません。我々は生徒自ら考え発表する機会やグループワークを設けたり、ゲームの様な遊び要素を取り入れた授業展開が生徒の理解を手助けすると考えています。そこで授業研究では「授業への巻き込み」をテーマに行っています。

昨年までは年間に1回ほどの開催に留まっていたのですが、今年に入ってからでは学期毎に最低でも1回は実施することを目標としてやっています。第1タームでは2月に、第2タームでは5月に理数科教師隊員が赴任している異なった地域で授業研究を開催しました。



本来ザンビア人の力だけで授業研究を企画・開催・運営してもらう事が望ましいのですが、まだ彼らは経験不足によりどのように組織したら良いのか分からない状況です。そこで日本人ボランティアが裏方として彼らにアドバイスをし、出来るだけザンビア人教員だけで授業研究会を動かしてもらうようにしています。



生徒の興味を引く為のツールは科学ではやはり「実験」です。模擬授業では実験を織り交ぜての授業をザンビア人教員に行ってもらっています。現地教員たちは実験が授業の中で有効である事は頭では分かっています。しかし彼らは「実験器具が無い」「準備が面倒だ」等の理由で実験をやらないことがよくあります。私たちは立派な器具が無くても身の回りにある物で代用して簡単に実験が出来るという事を彼らに紹介しています。彼らは実験器具を目の前になると興味津々になります。ザンビア人、実験大好きです。腰が重いだけなのです。

また授業研究を行うにあたってザンビア人と日本人の感覚のズレを見ることが出来ます。

- ・開始時間になっても参加教員たちが集まらない(平気で1時間以上遅刻してくる)

→遅れた分だけ模擬授業案を作る時間が減り十分に議論出来ない。

・いつの間にか帰る

・主宰側が用意しないといけないティータイムとランチタイムがある。

→これらを用意しないと文句が出る。むしろ教員たちは参加しない。

遅刻者続出で時間が押していてもティータイムとランチの時間はしっかり確保する。

・薬品などの消耗品を必要以上に使う。

このような事が大体毎回起こります。もうこれはザンビアの文化です。

教員は他の学校の教員の授業を見る機会はありません。なぜなら同じ時間帯に働き学期休みも全国一律で同じタイミングだからです。これは日本人ボランティアにも言えることです。わたしの配属先では G8・9 の理数科教師は私しか居ないのでザンビア人理数科教師がどのような授業を行っているか全然見たことありませんでした。このような授業研究があることによって他



の教員がどのように授業を行っているか見る絶好の機会になります。授業を見ながら「自分ならこの時どうする?」とか「この発問の仕方イイ」など考え、参考にして自分の授業へ持ち帰るのです。他の教員の授業を観察することはとても刺激になり教員自身のスキルアップになると考えられます。もっと授業を見る機会を増やしたいのですが、その為には通常授業を休まないといけないという障害があるので現段階ではなかなか難しいようです。



他ボランティアから聞く話によると、彼らの学校でも校長先生や副校長などの管理者が出張などで不在の時、一般教員たちは授業に行かない状況が頻発しているようです。授業の質を高めるとか言う以前の問題です。まず解決すべき問題は教師全体意識改革だと個人的に思います。

毎時間教師が教室に行き授業をするという当たり前のことをやる事が出来ればある程度自然と

生徒の学力は上がっていくような気がします。

Vol.7 に続く。